

## 最終報告書レポート

2018年4月25日～10月24日

宮内 康乃

### <活動所見>

本フェロシッププログラムで、私はマレーシア、インドネシア、タイ、カンボジアの4カ国を半年間かけて巡った。4月末から出発し、まずはマレーシアに1ヶ月、つづいてカンボジアに10日ほど、その後タイに2ヶ月、インドネシアに3ヶ月弱と滞在し、10月末に帰国するまでそれぞれの地で伝統音楽、芸能とコンテンポラリーなアートシーンの両面からリサーチを行い、数多くの素晴らしいアーティストたちとの出会いや、貴重な儀礼や芸能の鑑賞、楽器の演奏を習ったり、地元の人たちとワークショップを実施するなどたくさんの経験を得ることができた。また、その中で、人々の生活の中で音楽がどのような存在であり、社会の中でどのような役割を担っているのかをリサーチし、東南アジアを通して音楽の本来の意味や目的を深く見つめることを目的として旅をしてきた。まずはそれぞれの地での活動の概要と、私なりの各国の所見をまとめたい。

### マレーシア -三民族が共存する先端社会-

マレーシアといえば、やはりツインタワーに代表されるクアラルンプールの大都市を思い浮かべる。すでにかなり近代化が進んでいて伝統的な音楽などが盛んに残っていることはあまりイメージしにくい。というのが、正直元々私がマレーシアに抱いていた印象である。しかし、実際に足を運んでみると、三民族それぞれのとても豊かな伝統の世界が見えてきた。



マレーシアはマレー系、中華系、インド系と三民族が共存して暮らしていることがこの国の大きな特徴だ。よって首都クアラルンプールは特に、三民族の文化が共存し、うまく共生している様子が見える。モスク、中華系寺院、ヒンドゥー寺院がすぐ近くに並んでいたり、私が滞在していた5月半ば以降はラマダンの時期に入り、マレー系の人々は断食しているが、そのことを尊重し、配慮しながらインド系、中華系の人々は一緒にいつも通りに仕事を進め、夜になってラマダンの時間が明けると現れる露店の食事をムスリム以外の人たちも楽しんでいたりする光景が見受けられた。そんなマレーシアは三民族が共存しているからこそ、それぞれのアイデンティティーの象徴である伝統芸能がむしろ強く残っているような印象もあった。たとえばタイプーサムと呼ばれる、すでに本国インドでは廃れてしまったヒンドゥーのトランス儀礼が、クアラルンプールで毎年1月に行われていたりする。日常ではマレー語、英語、中国語、タミル語が飛び交い、違う民族同士の会話の機会には英語を使うことも多いため、皆英語も堪能で、最低でも2、3種類の言語を操ることができる。そういった多民族国家ならではのグローバルな側面と、それぞれの民族のコミュニティや伝統をきちんと大切にしようという側面と両面がみえた。今回私は特に、クランタンというマレー系芸能が色濃く残る地域の音楽を中心にリサーチし、カムルル・フシン氏という素晴らしい音楽家と出会うことができた。彼は現在クアラルンプールのUITM大学にてクランタンの伝統音楽を教えているが、彼の活動をリサーチする中で、現在やはり伝統音楽へ興味を持つ人々の著しい減少と、彼自身の次の世代への継承に対する強い意識が見えてきた。現代の人々が興味を持ち



やすいよう、オーセンティックな表現だけではなく、ギターなども取り入れたポピュラーなアレンジで数多くのライブ活動を行ったり、大学では五線譜に起こした譜面を使って楽器の演奏を指導したり、時代の流れに合わせて柔軟にやり方を変えている一方で、クランタン音楽に対する深い愛と強い誇りをしっかり持ち、その伝統を次の世代へきちんとパスしていくのだという強い使命感を持っていらっしゃる姿が印象的であった。彼から多くの話を聞く中で、私がこの旅を通して知りたかった、音楽の本来の意味や目的の答えがたくさん散りばめられていた。そして、彼の素晴らしい人柄からも伝統音楽を学ぶことはそこから世界の真理や哲学を学び、人間性をも育てる役割があることも思い知らされた。



マレーシアは、コンテンポラリーアートも盛んであり、クアラルンプールでは多くのギャラリーなどが存在し、とくに中華系コミュニティの人々が中心になっている。私が今回1ヶ月滞在させていただいた Toccata Studio もその一つで、作曲家の NGO Cho Guan 氏、マネージメントの E-Jan Tan 氏夫妻により経営されており、残念ながらスタジオやレジデンス事業は先日終了してしまったようだが、彼らの活動はKLのコンテンポラリーアート界の中心を担う。また、RAW ART Space、Lostgens といったギャラリーではビジュアルアートやコンテンポラリー音楽、ダンスなどジャンルを跨いだ様々なイベントが行われ、多くのアーティストたちが日々交流を図っていた。そんな彼らとも話をする中見えてきたのは、マレーシアという国が実は最先端な社会なのではないか、ということだ。中華系の彼らにやや意地悪な質問を試してみた。「自分たちはマレーシア人だと思うか、それともマレーシアに住んでいる中国人だと思うか？」と。彼らの答えは「私たちはマレーシア人である。中国人とは全く違う」という答えだった。一見それぞれオリジナルなルーツを持つ三民族が共存しているようだが、彼らはすでに「マレーシア人」というひとつの民族意識をきちんと持っているのだ。話す言葉はマンドリンだが、中国人の子孫、ということではなく、「マレーシア人」という独自の存在なのだと。また、彼らのお互いの違いを尊重しあって共存している日常をみていると、これぞ先端を行く国なのではないかと感じられる。昨今叫ばれている多民族が共存する「多様性と調和」がここでは実現しているように感じられた。強弱によって支配され、弱いものが強いものに塗り替えられていくのではなく、互いの違いを尊重しあって共存する社会の可能性がマレーシアでは実現しているのかもしれない。もちろんそれぞれの不平不満が時々耳に入ってきたり、問題点が見える部分もある。マレー系の比率の多さゆえ中華系、インド系が少し立場的には弱いことも少し垣間見える。しかし、三民族の共存の歴史は新たな「マレーシア人」という民族意識を作りつつあること、それでいてお互いの文化を維持し尊重していることはとても興味深く学ぶことが多い。奇しくも滞在中独立後初の政権交代という歴史的瞬間に立ち会ったこともあり、それに付随して現在のアーティストたちがどう今の状況をとらえているのか、そういった話を聞くことができたのも貴重だった。



これからのマレーシアがどういう歩みを見せるのか、とても興味深い。また、今回は時間的にも限られた地域のためのリサーチとなったが、たとえばボルネオ島にはまた全く異なる文化があったり、地域によってまだまだ異なる独自の文化が眠っており、とても1ヶ月という短い時間ではリサーチしつくせないくらい奥が深い。マレーシアの魅力はまだまだ未知数の面白さが眠っているということを思い知ってきた旅であったとも言える。

## カンボジア -負の歴史からの復興-

今回カンボジア滞在が10日ほどと短く設定してしまったことを、着いてすぐから後悔した。というのも、日本にいる間、会う人たびに「カンボジアはけっこう治安がよくない、危ない」という言葉を多く聞かされており、それで少し躊躇してしまった結果でもあった。しかしこちらでも想像と実情は大きく違って、首都プノンペン、ひたくりなど軽犯罪は時々起きるものの、それほどまでに治安が悪



いという印象ではなく、むしろ至る所で建設ラッシュだったり、街中にはおしゃれカフェや美味しいレストランも多数並ぶような、発展のまったただ中といった活気に満ちていた。今回私はプノンペンとシェムリアップにそれぞれ5日間ほど滞在したが、印象に残ったのはカンボジア人たちのひたむきな純粋さと、自国の文化に対する誇りであった。カンボジアはクメールルージュという負の歴史を抱えており、その当時多くの文化人たちが虐殺され、伝統的な文化の多くがそこで破壊されてしまった歴史がある。自国のオリジナルな文化を継承できる人たちがほとんどなくなってしまった危機的状況から懸命に復興し、これからもっと発展していこうという底力がカンボジア人からは強く感じられた。また、自分たちがクメール文化の発信地であるという強い自負をどんなに若いアーティストたちでも持っていた



のが印象的だった。近年は、今回受け入れ先になっていただいた Amrita Performing Arts や Cambodian Living Arts などの機関を中心に、文化の復興再生を目指し、それをさらにコンテンポラリーへと発展させていこうとする動きも多く、当時は欧米のディレクターが中心となって牽引してきたが、いまそれをカンボジア人のディレクターにバトンを渡し、自分たちの手で進めていこうとしつつあるようだ。もちろんまだ貧しい国であるゆえ、恵まれない状況も多く、政府からの援助もほとんどない

中、それぞれが自分たちの文化に対する誇りと、それを後世に残したいという強い意識を持つてできることから一つ一つ懸命に進めてきている、という姿は本当にひたむきで胸を打たれた。プノンペンで活動する Sovannaphum Theater は、伝統の影絵芝居スバエクトムを復刻させ、現代的なアレンジを取り入れて上演しているグループだが、団長さんは当時影絵の一部を発見したところから、懸命に文献や歴史を調べて自力でスバエクトムを復刻させたと語った。彼らは定期的に公演をしているが、政府からの補助金などは一切なくやっているという。そういう話はカンボジアでよく聞いた。今後カンボジア人の生活は発展とともにどんどん変わっていくだろう。そして彼らのあの底力があれば確実に進化していくはずだ。しかし、自分たちの文化を捨ててまで近代化を取るという心配はまったくないように思える。失った辛さと、自身の文化の誇りが強くあるからだ。これからのカンボジアの文化、表現が独自のプライドを残しつつどのように発展していくのか、とても楽しみだと強く感じた。また、一度失ったからこそその危機意識と、その伝統を次の世代にパスしたいという思いの強さは、自ら手放してしまった日本の状況とは大きく違う。いよいよ身近に伝統がなくなってきている昨今にもかかわらず、危機意識も使命感もない我々は、むしろ彼らの文化継承に対するひたむきさと懸命さから学ばなければならないことがたくさんあるのではないだろうか。いろいろなことを深く考えさせられるカンボジア滞在であった。



## タイ -仏教が息づく国-

タイは2ヶ月の滞在中、バンコク、ナコーンラチャシマー、ルーイ、チェンマイ、メーホンソンなど様々な地を巡った。バンコクは言わずもがなの大都市だが、15年前旅行で少しだけ立ち寄った時とみる影もないほど発展してしまっていて驚いた。今回は主にチェンマイに滞在したが、チェンマイは四方を城壁に囲まれた旧市街を中心にしたごんまりとした街並みで、コンテンポラリーアートも盛んでギャラリーも多く、



おしゃれなカフェやショップなども多数並ぶ素敵な街で、またお寺が多数あり、いっきに仏教文化が身近になる。傾斜の大きな三角のお寺の屋根の上にぶら下がっている風鈴のような鈴が風に吹かれて優しく鳴っているのがチェンマイの音風景として印象深い。タイは音楽も地域によって様々で、バンコクでは中央タイの宮廷音楽が中心だが、ナコーンラチャシマー、ルーイなどの東北部はモーラムと呼ばれる歌謡伝統音楽があり、ケーンという日本の笙と同じ流れの楽器を伴い演奏する独自の音楽がある。またチェンマイなど北タイではランナー音楽という独自の音楽が存在し、楽器も中央タイのものとはだいぶ異なる。さらに北タイの一番左上、ミャンマーとの国境部メーホンソンでは、ミャンマーから渡ってきた



タイヤイ族と呼ばれる人々の独自の文化があり、これまた他の地域とはかなり異なる。今回タイの様々な地域を少しずつかい間見ることができたが、全体を通して感じるのは、やはり仏教文化が根強いという印象である。バンコクで活動する若いミュージシャンたちと交流した際も、お経をベースに新しい音楽を作曲し、演奏する活動を通して徳を積むのだ、という言葉聞き、そういった意識が若い世代にもきちんと受け継がれていることに驚い

た。また、田舎は特に、公立の学校があるところの脇には必ずお寺があり、もともとはお寺がいわゆる寺子屋として、勉強を教えたり楽器の演奏を教えたり、学校の役目を果たしており、それが現代になって学校へと発展していったと聞くと、地域コミュニティの中心や教育、文化の継承地点はお寺であると実感する。また、私が滞在していた6-7月は、ワイクルーと呼ば

れる拝師儀礼が多く行われ、現在の師匠だけでなく代々の師たちに敬意と感謝を伝える儀式で、大学でも学校行事として行われたりしていたが、そういった儀礼の際も必ず僧侶たちが読経をあげ、儀礼の中心に存在する。ナコーンラチャシマーでは

「Light House」という瞑想の家に数日滞在したため、その際は修行する僧侶たちの朝夕のお勤めや、早朝の托鉢にも同行させて

いただいた。日常的にオレンジ色の袈裟を着たお坊さま方が街を歩く様子や、朝托鉢に回ってくるお坊さんに食べ物をお供えすることなどは未だにとても身近である。

そういったタイの人たちの生活を見ていると、仏教が根底にあるぶんだいぶ生きやすくなるのではと感じる。彼らの中には仏教的死生観が深く根付いており、たとえ死の淵にあっても、人間は誰もいつか死んで自然に還っていき、また死後の世界へと歩みを進めるまでだ、と思えばそんなに現世にかじりつき、死の恐怖におののくことはないかもしれない。またたとえ苦しい状況でも、今この苦しさを乗り越えることで大きく徳を積むことになる、と考えれば、どうして私はこんな辛い思いをしないといけないのか？と嘆くよりずっと心が楽になるだろう。私がタイに滞在していたのはチェンライで子供達が洪水





で洞窟に取り残されてしまった事件が発生していた頃だった。あの子供達が無事に生還した後全員が出家した、というニュースを聞いた時、タイらしいなあと感じた。これ以上良い解決方法はないように思う。あの事故によって命を救われたことへの感謝と、救助に来た一人がそのために亡くなってしまったことへの反省と弔い、すべて表明するためには「出家する」という選択肢がもっとも誰もが納得のいく解決方法で、誰も文句の言いようがない。そういった仏教文化が根付いていることは、日本の拠り所のない

不安定な現代社会を見ると、とてもうらやましく感じられた。タイの人々の根底に揺るがない信仰心は、音楽や文化とも深くつながっており、音楽の意味や目的意識はいまだに宗教と深く繋がっていた。我々日本人が失ってしまったものを今一度見直す上で学ぶことがたくさんあるように感じられた。

### インドネシア -文化の宝庫である巨大な国-

インドネシアといえば、東南アジアを代表する芸能の宝庫のような地。ガムランをはじめ独自の音楽や芸能が多数存在する地で、今回の旅でももっとも期待値が高かった地であった。が、改めてインドネシアに滞在してみて、いかにインドネシアという国が大きな国であるか、と



いうことを思い知らされた。聞けば西から東までの列島の連なりにアメリカ大陸がすっぽり入るほどの大きさだとか！日本と同じ島国としてそんなに違いがないような錯覚はとんでもなくまちがいであったと驚かされる。それだけ広大な範囲に島国が集まってできている国だからこそ、その文化の多様さはいうまでもなく、「インドネシアの芸能とは」ととてもひとくくりにまとめられないくらい地域によって様々である。その中でも今回は王道とも言えるバリ島とジャワ島はジョグジャカルタを中心に、それぞれ40日程度滞在した。

最初に向かったのはバリ島である。ちょうど8月頭からバリ島入りしたので、日本で言えば夏真っ盛り、当然暑いのだと覚悟して向かったのに、思いの外とても寒く、今回の旅で一度も来ていなかった薄手のセーターやパーカーを重ね着するほどで驚いた。また、乾季であるにもかかわらず毎日けっこう雨が降るのにも驚いた。どこも異常気象でだんだん気候が変わってきているのだろうが、やはり百聞は一見にしかずだ。

バリ島と言えば、言わずと知れた芸能の宝庫、神々の島と謳われるほど、日常的に芸能や儀礼が溢れ、いたるところで祈りを捧げているような、宗教と生活が未だに非常に密な地である。滞在中も宿の家寺の30年に一度の大きなお祭りに運良く当たってその準備から最後まで行程をすべて見る事ができたり、様々な儀礼を見聞きする機会に恵まれた。そういった彼らの活動を目の当たりにし、家族の一員のようにして参加させていただくことでより深く彼らの哲学が見えてきた。

バリ島では受け入れ先になってくださった Made Subandi 氏という素晴らしい音楽家の方に大変お世話になった。彼の天才的な才能と、その太陽のような人柄でみんなを魅了し、芸術高校 SMK で教えてらっしゃることもあり、多くの若い音楽家たちが彼のもとで育っていく様子を目の当たりにした。また、Cudamani 楽団というガムラングループの演奏のレベルの高さ、緻密さにも驚かされ、団長で長男の Dewa Berata 氏を筆頭





に、兄弟たちが中心となり、大家族で活動しているそのアットホームな空気と距離の近い信頼関係からこそ生まれる、それはそれは楽しい会話のようなイキイキした演奏は忘れられない。Cudamani 楽団の演奏を見ていて、「ああこれは理想の社会そのものだ」と感じた。そこにはどこにも埋もれた音も無駄な音もない。みんなそれぞれ自由にしているけれど、そこに確かに大きな調和と一体感と力強いグルーブがある。まさに私が音楽で実現したい「多様性と調和」がみごとに実現しているのだ。ここに私が求めていた答えがある、そう感じた。

Dewa Berata 氏とはいろいろとお話を聞かせていただく機会に恵まれた。彼も

またとても人格者で、深い哲学を持っていていろいろと興味深い話を聞かせてくださった。彼が言うには、なぜバリ人がこんなにも熱心に祭りをを行うのか、それは単に神様を喜ばせるためだけではない。神様は別にお金をかけて盛大にやってほしいと思っている訳ではない。お祭りを盛大にやることによって富を人々に分配し、経済を回す役割があるのだと。また、祭りの準備に集まることで人々がコミュニティ意識を強め、交流する機会を作ることにもつながる。なるほどやはり祭りはコミュニティ形成と運営のための大事なメディアであるのだ。さらに経済を回す役割があるという発想は今回初めて知って驚かされた。滞在中バリ人がよく「バランス感覚が大事」と言っていた。富も持ちすぎるとバランスが悪く傾くので分配する。効率ばかりを考えて無駄なことをやらなくなるのもバランスが崩れる。だから祭りの準備も大変で面倒なことではあるけれど、面倒なこともやるのがとても大事なのだと。その通りである。バリの人たちはそういった真理を皆深くわかっているのだ。ここには完璧なシステムが揺るぎなくある。この完璧なシステムが今の日本に欠けてしまったものを埋めるもっともよい答えなのだ。バリの人たちを見てい



ると、悲愴感が感じられない。また、貧富の差もそこまで大きく見受けられない。それは上述のような地域コミュニティの助け合いシステムがきちんと機能しているからだろう。また、無理して頑張ったり、欲張って大きな理想や目標を手に入れようとししない。そんな「足るを知る」というような自然体が、みんなが現状に満足し、幸せだと感じる大きな要因にも感じた。私自身もバリにいる時がもっともノーストレスでリラックスを体感していた。日本でどのくらい「私は今幸せです」と胸を張って言える人がいるだろうか。

また、社会のシステムと、音楽のシステムも見事に一致している。バリガムランの特徴は、「うなり」と「コテカン」であるが、うなりは音のピッチをあえて少しずつずらすことによってそのズレが生み出す音であり、人と人とが違って多様だから響きがより豊かになる、ということの象徴のようだ。また「コテカン」とは、いわゆるインターロッキングと呼ばれる奏法で、二人で交互に音を発するようまるで縦系と横系が絡まり、一つの織物が生まれるような音楽の構造のことであるが、これもまるで餅つきのよう



うに、相手との呼吸を合わせて対話するように深くコミュニケーションして初めて出来上がる音楽を象徴している。もちろん以前からこのようなコテカン構造に大きく影響を受けてきたが、この旅を通して、そういった表現がいかに社会の理想とするあり方と深く結びついているかを改めて強く実感した。

今回ある程度長い時間滞在できたことにより、そういった祭りや音楽を表面的に見聞きするだけでは気付かない、その奥にある真理やつながりがぐっと見えてきた。そこで感じるのはこの

理想をどうやったら私たちが取り戻すことができるのか？ということだ。かつての日本にもきっとこういった風景や行事は多数存在していたに違いないが、近代化が進み、便利、豊かに慣れてしまった日本の私たちは、もうこういった素朴な生活には戻れない。戻れないことへの喪失感と同時に、ではそれを今の日本の社会において新しい形で実現できる可能性を、これから探っていきたい、それこそ私自身がやるべき表現の意味なのではないか。ということ強く考えた。自分自身の求めていたことの答えと、これからやるべきことが明確になった重要な機会であった。



9月半ばからはジャワ島はジョグジャカルタに拠点を移し、同じく40日ほど滞在した。バリとジョグジャを続けて滞在できたのもいろいろと違いを知れる良い機会になったと思う。ジャワ島にもバリガムランと並ぶジャワガムランがあるが、旧知のごとくまったく性格が違う。バリガムランは力強く激しくスピードも速い。また上述のコテカンやうなりが存在する。一方ジャワガムランは

やはり宮廷音楽であるゆえ優美でゆったりと響き、コテカンやうなりは存在しない代わりに、より即興的に演奏者が自由に奏する部分を持つ。バリを離れる際空港に送ってくださったミュージシャンWijaさんは、ジャワのガムランは「very slow, very easy to play, but I don't like it.」と言っていた。バリ人にとってジャワガムランは刺激が足りないようだ。同じくジョグジャに着いてみると、ジャワ人たちはバリガムランはToo noisyだと言う。彼らにとっては激しすぎるようだ。また、ジャワでも西ジャワはもっとゆっくりで静かで、東に行くほどボリュームが大きくスピードも速く、激しくなっていくという。ジョグジャカルタは中央ジャワだからその



中間、中途半端なんだ（笑）と彼らはジョークを言っていた。このようにお互いの違いを少し揶揄し合うところがまた面白かった。実際にどちらも少しずつ演奏を習ってみると、私を感じるの両者の求めるものの違いである。バリガムランが大事に思うのは、上述のようなうなりとコテカンで、他者とのズレによる響きの多様さと、お互い息を合わせて緻密に絡み合っていくことを重視している。一方ジャワガムランは、一見するととても変化が少ないように見えるが、同じフレーズを繰り返しながら、そのテンポが絶妙に変化していったり、大枠の旋律だけが決まっていたり、それをヘテロフォニーのように奏者によって装飾をつけながら毎回変化させつつ奏していく、などミニマルな中の色彩の変化が重視されているように感じる。また、終わりのゴングが鳴るまでの「間」が演奏しているとたまらない。どちらも違った魅力があり、私はどちらも興味深く感じる。



ジョグジャカルタはイメージしていたよりずっと規模が大きく感じた。また、古都と呼ばれ、日本における京都のようと呼ばれるわりには風情のある静かな街並みというより、かなり車やバイクが激しく行き交い、活気のある町に感じた。しかしアートが本当にさかんな地で、とくにコンテンポラリーなアートに開いていて、毎週末のように様々な場所でイベントが開催されていた。また、伝統に関してはクラトンなど宮廷を中心に行われて

いる印象で、バリのように至る所でガムランの音を耳にするように人々の生活と密接な印象はなかった。しかし、ポロブドゥール遺跡の近くなど、少し郊外の村に行けばまだまだ民衆の土着的なトランス儀礼なども多数残っているようだ。結局滞在中正式なものには出会えなかったが、ジャティランというトランス儀礼が今でも盛んに行われているらしい。また、滞在中 Ruwatan と呼ばれる、儀礼のためのワヤンクリを見る機会にも恵まれた。子供や青年たちなど若者が成長の上で無病息災を願



って行われる通過儀礼的なもので、白装束をまとってワヤンクリを鑑賞し、後半スクリーンを開けてダランが若者たちの髪を一人ずつ切り、その後聖水で身を清めるといったものだった。やはりワヤンクリ自体が儀礼の一つであり、ダランは聖職者という役割を持つということを目の当たりにした。ジョグジャカルタはお城を中心にした伝統的で高貴な芸能と、新しいアートムーブメントが混在するととても珍しい土地だ。ISI Yogyakarta 大学をはじめ、大学が多数あることもあり、ジャワ島だけでなくインドネシアの様々な地域からやってきている若者が多く、ジョグジャにいればジャワだけでなくインドネシア中の人々と会えるような地であった。また、アートにおいても世界に向けて発信している印象があり、ヨーロッパなどからも注目を集めているため、ジョグジャにいるアーティストたちは、インドネシアだけでなく、世界にも目が開いている印象があった。ジョグジャカルタはバリ島にいるときの土地の人々の生活にどっぷりと浸る生活とは違って、1アーティストとしてこの地で発信し、反響を得て次の機会につないでいくような活動にふさわしい地であり、得るものが全然異なる。この2つの地を対比できたのはとても有意義であった。

#### <伝統とコンテンポラリーの比較>

本リサーチは、伝統的な音楽や芸能とコンテンポラリーなアートシーンの両面からリサーチをしたいという目的があったので、ここではその2つの側面からそれぞれの地を振り返ってみたい。

マレーシアは、首都クアラルンプールにおいては伝統的なものが身近にある、という印象は薄かった。だが、上述の通り今回主にリサーチしたクランタン地区にはマレー系の伝統芸能が色濃く残っているし、ボルネオ島にはまた全く異なる伝統が残っていたり、それぞれの地域によって独自の芸能はいまだ多数残っているようだ。しかし、日本と同様日に日に伝統的なものは身近から薄れ、後継者も不足してきているのが現状だ。しかし、3民族が共存しているからこそ、お互いのアイデンティティーの象徴としてむしろ強く残っていく部分もマレーシアでは見られるだろう。また、その文化が入り混じ



って新しい芸能が生まれているものもあるのではないかと推測する。食事でババニョニヤ料理と言って中華系とマレー系が合わさった新たな食文化が生まれたように。もちろんなかなか政治的、宗教的な問題で、今は違う民族同士の結婚も容易ではなくなってしまっている部分もあり、文化がどんどん混合していく、というのは難しい様子も見えた。また、国教がイスラム教ゆえに昨今、クランタン地区でも長年残ってきた芸能がもともとの土着信仰や

仏教の教えなどを含むため、上演禁止になってきていたりするなど、存続に政治的、宗教的なことが影響している様子も見える。

コンテンポラリーは、クアラルンプールではさかんで、とくに中華系コミュニティの人々が中心となってムーブメントを作っている。多くのギャラリーがあり、欧米や日本のアーティストの展示も多く見受けられ、私が滞在した Toccata Studio のようなレジデンス施設も多い。コンテンポラリーダンスのパフォーマンスなども多数見受けられた。また、伝統とコンテンポラリーをつなぐような活動も見受けられた。お会いしたアーティストで、作曲家のイーカホー氏は、自身のルーツとなる中国楽器オーケストラの現代音楽を作曲したり、民族的な笛を使ってコンテンポラリーな即興演奏を、コンテンポラリーダンサーやボイスアーティストの Siew-Wai Kok 氏らと実施されていた。今回は時間的にリサーチしきれなかったが、ペナン島もコンテンポラリーがさかんでさまざまな活動が見え、街中もアート作品が見られたりした。

カンボジアは、伝統とコンテンポラリーを分けて比較するのは難しい印象だ。というのも皆ベースは伝統から派生しているからである。やはりクメールルージュからの復興で、まずは伝統をきちんと取り戻す、という動きがしばらく続いてきて、ようやく近年コンテンポラリーへと発展させる動きが出始めたころ、という印象で、とくに音楽はコンテンポラリーな活動をする人はまだまだ少なく、お会いしたアーティストの Sokunsea 氏（通称 Nai 氏）が唯一新しいことに取り組んで、コンテンポラリーダンサーともコラボレーションしたりしているミュージシャンだと紹介を受けた。彼ももともと伝統音楽を司る一家に生まれ、お会いした際もレストランでのショーとして家族で伝統音楽を演奏する機会に同行させていただいた。よってそれをベースに新しい取り組みをしはじめたところ、といった様子だった。



Cambodian Living Arts は伝統の復興に貢献するためさまざまな取り組みを行っており、アジア各国のアーティストを集めて、お互いの伝統音楽を聞かせあい、その上で共に新しいクリエイションに取り組む企画とか、カンボジアの田舎に伝統音楽のミュージシャン達をバスに乗せて出向き、そこで村の人たちにカンボジアの伝統楽器の演奏を聴かせ、すでにそういった音楽の存在を知らない人たちに広める活動を行うなど、とても意義深く興味深い活動をしている。また、プノンペンでは、定期的に劇場で行われている伝統芸能のショーのオーガナイズも行っている。また、受け入れ先になっていただいた Amrita Performing Arts は、当初はやはり伝統の復興を中心に行っていたが、近年コンテンポラリーに進みつつあり、関わるダンサーたちは、そこから世界に活躍の場を広げている印象だ。私が Asian Cultural Council の助成でニューヨークに滞在した際にお会いしたカンボジアのアーティストたちと皆 Amrita を通じて再会できた。彼らもみなそういった助成金を得て世界で活動をする機会を得ていたり、まだ小さなコミュニティだからこそ、そこで活躍するダンサーは世界と繋がるチャンスを得やすい印象も受けた。日本の演出家小池博史氏や、ダンサー北村明子氏らも Amrita に関わるダンサーたちとコラボレー



ションしており、日本にも何度も来日して活躍しているダンサーも多い。一方シェムリアップでも面白い活動が見られた。伝統のスパエクトイを現代的にアレンジしたショーを行う Bambu Stage や、新しい取り組みをしつつも音楽は伝統楽器の生演奏を使ったサーカス集団 Phare など、伝統をベースにしつつ、観光客向けにアレンジしながら新しいことに取り組む面白いショーを見ることができた。そして、シェムリアップとい

う土地柄上観光客向けに上演されることが多く、表現も現代的になっているが、どんなショーも必ず始まる前にソンペア・クルーと呼ばれる、短い祈りの儀式をおこなう。そこにも芸能を行うことの根源的な意味や、神や先人の芸能者たちとのつながりが失われていることが見える。また、まだ20代前半のとても若い女性ダンサー4,5人のみでやっている「NCA(New Cambodian Arts)」という団体も面白い。公的機関からの援助もいっさいなく、プノンペンよりもさらにコンテンポラリーのコミュニティ



が小さいと嘆きながらも懸命に活動しており、毎週土曜日にはスタジオでパフォーマンスを発表している。訪れた際は欧米の女性ダンサーが彼らに振り付けをして週末のショーに向けてリハーサルしていた。動きを見るとコンテンポラリーに関してはまだまだこれからという印象だが、面白いくらいに伝統舞踊アプサラダンスのしなやかな表現が随所に混ざって見えてくる。彼女たちが伝統舞踊を学んだ上でコンテンポラリーに挑戦する故だ。こういった融合とカンボジアダンスの独自性が生かされて新しい表現が生まれていくのはとても興味深い。指導していた欧米のダンサーも「彼女たちのオリジナルな良さを絶対に失わせたくないし、それを生かした上でコンテンポラリーに発展していくヒントを少し与えているだけだ。自分も彼女たちの伝統舞踊の動きからたくさん学ぶこともあるから、こちらが教えてこちらのスタイルに巻き込むのではなく、相互の学びのエクステンジだ」と語ってくれた。それを聞いて安心したし、そういった欧米のコンテンポラリーをヒントにしながらかつ彼らがどのように独自の表現を発展させていくのか、とても楽しみだ。

タイもやはり都市部では伝統的なものはそんなに身近な印象は少なかった。バンコクで滞在していた宿の若いオーナーも、これまで伝統的な音楽などに触れる機会はほとんどなかったと語っていた。しかし、訪れたバンコクの Triadom sukka 高校のように、普通高校の部活動で中央タイの音楽を盛んにやっていて、しかもかなりのハイレベルな演奏をしている様子を見ると、日本に比べればもっと盛んな印象を受ける。また、タイは国立芸術学校があり、そこで伝統音楽、舞踊を学ぶシステムがかなり確立されており、お会いした若手音楽グループ「Tiger Drums」のメンバーたちは皆その国立芸術学校の卒業生たちで、そこできちん



と伝統音楽や舞踊を学ぶと、その後その道できちんとして食べていけるようになるようで、貧しい家庭で育った子供も、こういった学校に進学して学ぶことによってちゃんとプロの踊り手、演奏家としての道が開けるよいシステムなのだ、と聞かせてくれた。今回受け入れ先になってくださった音楽家で民族音楽学者でもある Anant Narkkong 氏は、世界中の民族

音楽のリサーチャーでもあり、伝統音楽に精通されつつ新しい音楽を作曲される方で、彼の活動に大きく影響を受けて次世代が育ってきており、タイ音楽において伝統とコンテンポラリーをつなぐ重要なキーパーソンだ。

チェンマイではチャンソーと呼ばれる男女の掛け合い歌があるが、今でも比較的色々な場所で演奏されており、だいたいはホストとなる家が結婚式などイベントの際に雇って演奏してもらい、参列する人たちが楽しむという形だが、今でもチャンソーの歌手や演奏家たちはそれで食べていけるような土壌があ

るようだ。そう思うとまだ伝統音楽、舞踊の需要が日常にあるということだろう。また、ランナー音楽の奏者であり、楽器製作者兼現在は宮大工まで手がけるボーイ氏は、ランナー音楽復興に大きく貢献した一人で、面白い話を聞かせてくださった。彼らが子供の頃にはすでに身近にランナー音楽がなく、おじいさんたち世代に必死に聞きながら自力で勉強し、周りから変人扱いされながらもその魅力に魅了された同じ興味を持つ若者たち数人で、ランナー音楽をもつ



と復興して広めたい！と、楽器を背中に担いでバイクで町中を走り回ったり、多数コンクールに出て優勝したり、楽器を自力で作ったり、と様々な活動をしたようだ。そんな活動から次の世代が影響を受け、今では再び学校でも教えるような身近なものになったという。ランナー音楽はもともと年頃のお見合いの目的があり、楽器を演奏しながら男子たちが出かけて行き、意中の女の子が機織りをしている脇で演奏して、そのやり取りを通して交流し、将来の結婚相手を探す、といったコミュニケーション手段としての役割があったらしい。今ではそういったシーンで使われる



ことがなくなっても、音楽を残すために、彼らのようなある種救世主たちが現れてムーブメントを作り、そこから消えかけた伝統が復興するというのは興味深い話だった。

そんな中コンテンポラリーな活動もそれなりにさかんだった。今回はバンコクでは時間的にそこまでリサーチができなかったが、やはりコンテン

ポラリーアートや音楽の活動は多々あり、ギャラリーも多数存在する。バンコクではBACCというコンテンポラリーアートの美術館を訪れたが、グッゲンハイムを思わせるような螺旋回廊を持つ立派な美術館で、タイの現代アートが垣間見えた。また、チェンマイでもサンカンペンという郊外にはMaiiam 美術館、チェンマイアート美術館などコンテンポラリーアートの大きな美術館も存在するし、市内にもやはりギャラリーが多数存在し、中でも「See Scape Gallery」でのオープニングイベントや、チェンマイ大学のギャラリーでのオープニングなどに参加したが、多くのチェンマイ拠点のアーティストやチェンマイ大学FineArt 学科の先生たちも参加し、交流の場が生まれていた。お会いしたサウンドアーティスト Arnont 氏は、テープレコーダーなどを使って演奏するノイズ系ミュージシャンだが、その表現は繊細で、ノイズエレクトロニカというものからイメージするよりずっと柔らかい方だった。また、彼自身も伝統音楽にも興味を持って、上述の Anant 氏を師と仰いで影響を受けているし、近年カンボジアの一般人である電気技師のおじさんと機械を使った演奏のコラボレーションしたり、地域コミュニティの人たちとワークショップを行うなど、伝統と現代のつながりや、音楽がコミュニティ形成の役割を持つことなど、私と同じような興味を持っている事もわかり、コンテンポラリーをやる人も伝統やコミュニティのつながりを意識していることがわかる。



もう一人お会いした若手の音楽家、Puri 氏の話も面白かった。彼も中央タイ音楽を学んだのち、西洋音楽を学び、そのベースが生かされ西洋音楽式作曲でも異彩を放って注目されたり、現在も Payap 大学でタイ中央音楽を教えつつ、大学院生として現代音楽や伝統音楽の記譜法の確立などを研究しているようだ。彼は西洋音楽のような



正確に記譜する方法を伝統音楽に確立したいと話し、かなり西洋音楽寄りになっている印象を受けたが、

それは発展の上で必ず通るべき道で、一度は通った上でまた自国の伝統をもっと深く認識することになるから、もう少しいけるところまでいってみたいのだ、と語った。きちんと客観的に把握して歩みを進めていることがわかり、頼もしく感じた。また、あくまでタイの新しい音楽を創造したい、と力強く語ってくれたのが印象的だった。

このように、タイも伝統とコンテンポラリーの両面がありつつも、その二つは根っこで繋がっていて全く別のものではないという印象だ。また、ランナー音楽復興も含め、生活から離れて消滅しかけた時に、その魅力に見いだされて情熱を持って復興に尽力する世代が現れたりするのも面白い。



インドネシアは、バリ島においては、コンテンポラリーアートというのはほぼ皆無に等しい印象だ。というくらい伝統的なものが強く身近に残っている。反面、とくに美術などはコンテンポラリーにはかなり開けていなく、ギャラリーでの展示を見ても一昔前の表現といった、やや遅れている印象だ。しかし、上述の Cudamani 楽団でも古典曲だけでなく、新作のガムラン曲や若いダンサーによる新しい振付の作品を上演したり、伝統をベースにしながら新しい表現へと発展させており、とても面白い音楽になっていて興味深かった。

また、受け入れ先となってくださった Made Subandi 氏も伝統の演奏はもちろん素晴らしいが、それに飽き足らずどんどん新しい曲も作曲し、さらにはかなり実験的な即興演奏も得意とされ、ヨーロッパやアメリカなど世界中のアーティストたちとセッションされている。もう一方で、Gus Teja 氏というミュージシャンにもお会いしたが、彼は今バリで超売れっ子ミュージシャンであり、彼の音楽は観光地やレストランなど至る所で流れていて聞かない日はないくらいだ。音楽としては、やはり伝統楽器をベースにしながらチューニングを西洋楽器に合わせたり、新しい笛も多数ご自身で制作され、ギターやコンピューターなども取り入れた、イージーリスニングというようなポピュラーミュージックを発表している。正直かなりポピュラー寄りで商業的な音楽になってしまっている印象で、バリ音楽の真髓的な部分は少し失われている印象も否めないが、しかしあくまでバリの新しい音楽を模索している、自分自身もまだ発展途上だからこれからどう変化していくかわからない、と語る彼の目はまっすぐで、これも一種のバリコンテンポラリーのひとつだと感じた。いずれにせよやはりどのミュージシャンもベースに伝統音楽があり、その上でのコンテンポラリーであるという印象が強く、伝統の根っこが本当に深いと感じる。

反してジョグジャカルタは本当にコンテンポラリーがさかんだ。そのくせ伝統的な宮廷文化もしっかりあり、それに深い誇りを持っているので、その二つが共存しているとても珍しい状況だと思うが、コンテンポラリーをやりたいインドネシア人たちはこぞってジョグジャに集結している印象があった。彼らはバリのアートシーンをよくこき下ろす。「あそこにいるとアートはクラフトアートになってしまい、売



るための絵になってしまう。バリは観光に魂を売ってしまった地だから」と。実際にバリにいと、私はバリ人がとても観光に魂を売っているようには見えないが、やはり伝統が強いゆえ、音楽やアートの目的はあくまで宗教や儀礼に繋がっており、自己表現としてではない。自己表現としてのアートをやりたい人はジョグジャやバンドゥンなどに集まっているようだ。ジョグジャは一説には「第二のベルリン」とも呼ばれているくらいアーティストたちが世界中から集ま



ってくる地でもある。実際地価も安く、広いスタジオを安価で持つことも容易な上、コンテンポラリーアートの土壌やコミュニティがあるので、表現できる場、機会が多く、さらにインドネシアや東南アジアだけでなく、欧米にもプレゼンテーションできるようなチャンスが多数繋がっているの、アーティストにとっては楽園のようだ。MES56 というスペースには夜な夜なアーティストたちが集まり、お酒を飲みながら交流し、情報交換している。Senyawa

をはじめ、新しい発想でとても面白い音楽を発信しているアーティストたちも多数いる。滞在中「nusasonic」という実験的ミュージックのフェスティバルがあった。そのフェスティバルは Goethe institute がスポンサーになっていることもあり、ドイツからのキュレーターやヨーロッパからのアーティストたちも多数参加していた。ライブを聞いていると、一見使っているのは皆コンピューターなどエレクトロニカやノイズなど新しいテクノロジーを使ったものなのだが、しかしインドネシアや東南アジアのミュージシャンは、その中に竹などで作った自作楽器を取り入れていたり、ハーモニーはガムランからの影響を感じたり、歌は民族的なメロディーや発声を感じられたり、どこかやはり土臭く、ヨーロッパのアーティストとはやはり全然違う響きがある。それがとても興味深かった。Senyawa の片方、Wukir がやっている別ユニット「Potrojoyo」の人たちと話をしている中で、彼らも私と同じように、「音楽はメディアだから、人と人をつなぐ道具である」というような話もしてくれて、考えていることがとても近いと感じ、とてもうれしかった。やはりここがアジア人の表現の根っこが、コンテンポラリーの中にも含まれている。

全体を通しての感想も同様だ。4カ国それぞれのアートシーンを見ていくと、伝統とコンテンポラリーと2つの側面に分けられないくらい密接であることを感じる。コンテンポラリーな活動をしているアーティストたちもベースにたいして伝統の根っこを持っていたり、表現の目的意識もどこか宗教や芸能と繋がっている印象がある。そして、東南アジアのアーティストたち誰もがいうのが、「あくまで自国の新しい音楽を切り開きたい」ということだ。そのしっかり根っこを持っていて、そのベースの上で発展させていきたい、という意識がとてもうらやましく思えた。私たち日本人はどうだろうか？私自身も西洋音楽を学ぶことから始めており、日本の伝統音楽の根っこが体に染み付いているとは言えない。どこか根っこのない不安定さを感じてしまう。そして、日本独自の新しい音楽を発展させたい、という意識でコンテンポラリー音楽をやっている人たちがどれだけいるだろうか？同じアジアでもその差を見せつけられたような気がする。



## <考察>

この半年に渡る東南アジアリサーチを経て、自分なりに得た考察、またそれを経て今思うことを以下4つの観点からまとめてみる。

### 1. 音楽は万能メディアである

この半年間のリサーチを経てまず強く思うことは、まさに「音楽はメディアそのものだ」ということである。当初から音楽はコミュニケーション手段の一つであって、人と人、人と自然、人と神などをつなぐメディアとしてあるもので、音楽の本来の意味や目的はそこにあるのだ、ということは考えていたが、この旅を通してそれがまさに確信に変わったと言える。それはたしかにそのように機能しているシーンを、東南アジアの各所で目の当たりにしたからである。また、音楽は単にコミュニケーションツールというだけでなく、人を育て、生きる上での道徳や知恵、人との関わり方などを学ぶ教育のメディアとしても多分に機能していると分かった。旅を通して出会った多くの素晴らしい音楽家たちを見て深く感じた。彼らが素晴らしい音楽家であるだけでなく、本当に人格者で深い哲学をしっかりと持っており、そしてそれを次の世代に引き継ぐ使命感を強く持っている。彼らの素晴らしい人間性や世界の真理を知る哲学はどこから学んでいるかといえば、まぎれもなく音楽を学ぶことからである。音楽を学ぶことは単に演奏技術を習得することだけでなく、そこから人間として他者との間でどう振る舞うべきか、人間が大きな流れの一点でしかなく、そこに順応し、自然界の恵みを享受し感謝して、それを次の世代にきちんとパスするという自然界の真理、長い時間を経て紡がれてきた生命の流れの一点であり、それを次につなぐ使命があるという生命の根源哲学を、感覚で深く学び取るからである。

また、社会を潤滑に運営するための万能メディアでもある。バリで聞いた上述の話からもわかるように、芸能や祭り、音楽のために人々が集い、ともに1つのものを作り上げることから、コミュニティ意識が生まれ、より深い信頼関係が築かれる。またさらにそれを実施することによって富を分配し、経済を回す効果までであるという。まさにコミュニティの潤滑油として最も優れたメディアであり、先人たちから引き継がれた人類の重要な智慧である。昨今の近代化された多忙な日常では無駄なものとして切り捨てられてしまった、そういった祭りや芸能が実はとても重要なメディアであり、それを失ってしまったからこそ、多くの歪みや現代社会特有の問題が生まれてきていることは否めない。それを、バリをはじめ伝統芸能に携わる人々はよく分かっているのだから、決してそれを失う選択をしないのだ。

### 2. 「身体から学ぶ」ことの重要性

二つ目に思うのは、身体から学ぶことの重要性だ。この旅で様々な場所で少しずつではあるが、伝統音楽を学ぶ機会に恵まれた。基本的に伝統音楽には楽譜がなく、師匠の演奏を見て、耳や身体で覚えていく。それはたしかに楽譜があるよりずっと効率が悪く時間がかかる。私自身も幼少期から西洋音楽をベースに学んできたため、正直口伝で身体から楽器の演奏を覚える、という体験をしっかりとやったことは初めてのことであった。今回それを体験できたことで、見えてきたことがたくさんある。

もちろん楽譜がなく耳や身体で覚えていくことはとても時間がかかり、忍耐のいることだ。しかし、その効率の悪さからこそ学べるものがたくさんある。実際に習ってみると、使う感覚が全く違う。楽譜があるとすぐに初見で弾くことはできるが、次の瞬間すべて忘れてしまう。しかし身体から時間をかけて覚えたことは、弾く瞬間には一瞬思い出せなくても、手を動かすと自然と身体が動き出す。そして決して忘れない。また、師匠の技を見て盗め、とよく職人の世界で言われるが、あれも実はとても理にかなっている。もちろん時間はかかるが、先生と自分の違いはどこなのか、よく感覚を澄ませてその違いを

見極めることが必要になってくる。勤のいい生徒はそこを見つけるのが速いのだろうが、そうやってよく見る、聴くことや、自主的に学ぼうとする能動的な姿勢が必要で、それが学びを深くする最も重要な要素だろう。また、すぐできなくても辛抱強く向かう忍耐力、集中力なども養われる。

ガムランの演奏をしている時にフッと急に真理が降りてきた瞬間があった。演奏していて全体のテンポやボリュームがふっと変化するのを感覚で感じて自身の音をそれに合わせていく。そんな時「ああそういうことか！」と真理が降りてきた。一人の中心に周りが合わせているのではなく、全体で作っている一つの響きがふっと弱まった時にそれに反応する。それは言葉ではなく感覚だけで伝わり、交信しあう最も深いコミュニケーションであり、言葉を介さなくてもたしかに伝わって感じられるものだ。また、全体の調和を考えた時、今自分はどのような音を出すべきなのか、頭で考えるより感覚で瞬時に体感できる。こんなに深いコミュニケーションは言葉を介しては絶対に実現できない。楽器を演奏することで、人との接し方、全体の調和を考え、しかし絶対的な力に自己を押し縮めて合わせるのではなく、それぞれの揺らぎの中に調和していくような、自分らしくありながら心地よい、そんな社会での振る舞い方が、こんなにも見えて来る。道徳の授業をするより、楽器の演奏をするほうがよっぽど感覚からすんなり理解し、学ぶことができるのではと感じた。そう思うと、音楽の授業の意味が大きく変わる。単に技術を身につけるためという捉え方をしてしまうと、優劣がつくだけでむしろコンプレックスを作るにすぎず、学びたい人だけ、得意な人だけがやれば良いと学校教育から外されてしまいかねないが、こういった側面の音楽の有効性を理解すれば、音楽教育の意味が全然生きてくるのではないか。

### 3. 芸術と芸能のはざま

このリサーチで、儀礼や芸能に多く触れることができた。中にはトランス儀礼もあったり、かなり土着的なプリミティブなものもあった。そういったいわゆる「芸能」を見ていると、「見せる」という視点のなさを実感する。対象が人間ではなからだ。だがそのため時にはダラダラとなかなか始まらなかったり、いつの間にか見せ場が終わってしまっていたり、とても長い時間だったりする。やはり目的は人々が鑑賞するためでなく、神様に捧げるためであるから、人々がどう見るか、は問題ではないからだ。それが観光客向けやステージでのショーとなってくると、だんだん衣装もきらびやかになり、内容も短く見せ場だけを誇張するようになる。そして本来のなんのためにやるか、という目的意識が薄れ、表面的な「型」だけが残っていく。

一方芸術となると、「表現」ということが一番重要となる。パフォーマンスアートであれば、どう見せるか、どう作品としてのクオリティを高めるか、ということはとても重要で、より洗練され、抽象化され、またより高い表現力を要し専門性が強くなる。そのぶん表現としては、芸能よりずっと美しいものへと発展してきた。また目的意識も、コミュニティ全体のためといった「私たち」が第一人称ではなく、自己表現といった「私」個人が強くなり、人々の生活からは遊離していく。

今回の旅を通して、私は「芸術」がもう少し「芸能」の力を取り戻し、人々の生活と繋がりがあり、必要なものとして機能していく必要があると感じた。たしかに表現の極みを追求していくことも素晴らしいが、生活と遊離してしまい、一部の専門家だけのものになってしまうと、大半の人には「関係のないもの」となっていく。その違和感を昨今皆感じ始めており、また今の混沌とした社会の歪みを埋める手段として「芸能」の力の取り戻しが必要だということにも少しずつ気づき始めている時代ではないかと思う。だからこそ、アートにもう少し「芸能」としての機能を取り戻していくことができないだろうかと思うのだ。その反面、上述の通り、芸術は芸能より洗練された表現の美しさを有する。私は芸術と芸

能の「はざま」にあるものを目指していきたいのかもしれない。芸能のように本来の目的、社会における役割を持っていながらも、21世紀の現代、芸術という表現の美しさを追求してきた後の世代だからこそ、より洗練された表現を持つ、新しい芸能、音楽というものを目指せるのではないかと今感じている。

#### 4. 音楽の「未来」を考える

この旅を通して、様々な国の表現やその違いを見て、改めて考えさせられる。自分が日本人としてこれから表現していくべき音楽はどんなものなのか？出会ったアーティストは皆誇らしげに言うからだ。

「私は自国の新しい音楽を追求していきたいのだ」と。昨今グローバル化が進み、世界中画一的な文化になりつつある。誰もがジーパンとTシャツを着ている今、それぞれの地域性や土地に根付いた違い、というものがどんどん薄れてきている。東南アジアも、これからどんどん発展していき、グローバル化が進むと同じ道を歩むことにはなるかもしれない。現にバリは例外としても、今回周った国々どこも伝統に携わる人、興味を持つ人がどんどん減っていつているのは事実である。しかし、そんな中でも私たちと違って彼らはどこか自分たちのオリジナリティや根っこを強く意識している印象はある。カンボジアのようにそのアイデンティティーを一度失いかけて取り戻そうとしている場合には、より自国の表現を引き継ぐことを強く意識するだろう。しかし、明治以降欧米に追いつけと必死になって自ら伝統を手放してきた私たちは、その失うことへの危機意識すら持てないまま、すでに私たちの世代は身近に自国の伝統に触れず、いきなり欧米をベースとした表現からスタートしている状況は、やはり根っこのない空虚さを感じられてならない。

かといって求めているのは自国の文化を強調すべき、というナショナリズムではない。昨今流行りの「□□□ファースト」で自国のものを誇示して守るのだ、ということではなく、それぞれの違いが自然と滲み出てきながらも調和していくことが理想である。日本人だから邦楽器を取り入れた音楽を作るべき、とか日本音階を使うべき、とかそういった表面的なことではなく、根底に流れる「何か」を意識する必要なのか、その自分たちのオリジナリティやアイデンティティーとは何を指すのか、は私にも未だはっきりと答えは見えていない。

カンボジアでワークショップをした際、通訳をしてくれたカンボジア人の男性が終わった後感想を伝えてくれた。「あの森の音を声で表現するシーンでは、お互いの音を深く聴き合って感じ合うことにとっても感動し、これはとても日本人的な表現だと感じた。」と言ってくれたのだ。短いワークショップからここまで深く感じとってくれたこともうれしかったが、そこに彼が私の中から無意識ににじみ出る日本人らしい感性や表現を見出してくれたことが驚いた。私自身はそれを日本的な表現として意識的に行っているわけではないが、外国の人から見ると、日本人らしさが見えると知って、意識せずとも滲み出てくるものなのかもしれない、と思った。私たちは日本の伝統芸能を直接学ぶ機会を持たなかったかもしれないが、日本の文化で培われた日本人ならではの感性や表現は無意識化で受け継いで持っているのかもしれない。そういったことに初めて気付かされたのだ。そして、それに気づくことができるのも海外に出て外国の人たちと触れ合うからこそである。

また、ジョグジャカルタで出会ったアーティスト、Sutanto氏も大きく私に影響を与えてくれた。彼はボロブドゥール遺跡の近くに住み、村のコミュニティの人たちと関わり合いながら、オリジナルなフェスティバルを仕掛けるなど、まるで村の人たちにとっての村長さんのように、コミュニティに根付いた大変面白い活動をしている。彼が言うには「伝統もコンテンポラリーも関係ない。みんな表現を通してクレイジーになりたいんだ！クレイジーになるならどっちだって線引きはいらないし、これまでのものをきちんと守ることが伝統でもないし、新しい音楽は高尚なアートの世界だけであるものじゃない。そ

れをやりたいように織り交ぜて、村人みんな参加して、今の自分たちの表現を作っていけばいい。そしてそれをどんどん発信して新しい伝統を作っていけばいい。」と。それはまさに！という大きな答えであった。伝統とコンテンポラリー、と二極化させて議論すること自体、ナンセンスなのかもしれない。カンボジアで、伝統の織物を復刻させた日本人、森本喜久男氏が残したという言葉聞いた。「伝統とはそのままの“型”を残していくことではなく、根元の精神を引き継ぎつつ、常に変化し進化していくことだ」と。まさにそういうものなのかもしれない。

今回の旅を通して、一生かけて考えていくべき大きな命題にぶち当たった。ではこれから私は何を作っていくべきなのか？アジア人として、日本人として、21世紀の現在に。ある意味この旅で得たのは、最も大きく、簡単には出ない難題である。その答えはそう簡単には出てくるものではないが、それを追い求めることが生涯やるべき目的になると確信している。いずれにせよ、これから私たちが表現していくべきもの、アジア人として、しかし欧米の文化や表現も学んだ上で、それでも滲み出てくるアジア人らしさ、日本人ならではの部分、そして表現する意味や目的、社会に役割を持つ音楽のあり方とは。それこそ私がこれから深く考え、向かっていくべき大きな命題である。

私なりに今出した目標は、あくまで「メディア」として社会に役割を持ち、音楽にしかできないことを実現する、それでいて芸術的な表現のすぐれた、アジア人らしい新しい音楽を創造していくことである。それこそ私が一生かけて取り組んでいきたい大きな命題だと感じている。その命題を見つけられたのはまちがいなくこれだけの貴重な経験をし、数多くの素晴らしい人々に出会えたからである。私はこの果てしない命題に、これから一生かけて取り組んでいきたい。改めて今回の機会をくださった国際交流基金のみなさまに感謝を述べるとともに、これを機にさらなる進化を目指していくことをここに誓いたい。